

黒曜での一件から二週間後――

小言弾の使用により酷使された体が長いこと筋肉痛を訴えていたが、それもようやく治り、ツナは久し振りの平和な生活を満喫していた。

「あー、やっぱり平和が一番だなあ……」

昼食を済ませると、一人屋上に寝転がり青い空を見上げる。

平和が一番。

そう口にはしたが、復讐者に連れていかれた骸達はどうなったか心の隅に引っかかっている、それが時々頭をもたげる。

リポーンに尋ねてみても、「知らねーぞ」の一点張りです。それ以上の情報は得られなかった。

六道骸がしてきた事は許せるものではなかったけれど、骸に操られ、今までずっと骸の影武者として幾人もその手にかけてしまったランチアはもちろんの事、幼い頃自分のファミリーから迫害を受けてきた骸達も、罪を犯したとはいえず、裁かれ重い罰を受ける事に疑問を抱いていた。

骸達の事はまた折を見てリポーンに聞いてみよう。

そう決めて、ぼつんと残った蟠りを心の奥に仕舞い、目を閉じて思考を停止させた。

◆
どれくらいそうしていただろうか。

頬を撫でる風の心地良さに身を任せていると、ふと目の前が騒る。

「ツーナ」

「わっ!？」

まだ意識がぼんやりしたまま目を開くと、自分を呼ぶ声と共に金髪の幼い少年の顔が飛び込んできた。

「ワリィ、驚かせちゃったな」

驚いて飛び起きたツナに、突然現れた少年は悪びれた風もなく、ごく親しい友人にするようにニッと笑いかけてくる。

（だ、誰、この子。ウチの制服着てるし、同い年みたいだけど、オレの学年に留学生なんていたっけ……）

自分と同じ学年ではなかったとしても、並盛中に留學生が来たなんて話は聞いた事がない。

酷い筋肉痛で動く事もままならず、学校を休んでいたこの二週間の間に転入してきたのだろうか。

ツナは頭の中を疑問符だらけにしつつ、少年の顔をじっと見つめた。

「ん？ どうしたツナ。オレの顔に何かついてるか？」

「え？ あ、ご、ごめん。何でもないよ!」